

ウィルデンシュタイン・プラッターナー研究所

ポール・ゴーギャン作「パペ・モー」

由来

1899年4月11日、オランダのハーグで開催されたバンコク講和会議に、参謀本部第三部（対外軍事地理情報統計部）部長で陸軍技術者の上原勇作が、出席委員の林忠男爵の随行者として派遣された。

【上原勇次郎元帥の伝記 第一部】

この間、勇作はフランスでの愛人であったジルベルト・ポンピドゥーの勧めで、ヴォラール画廊でゴーギャンの「パペ・モー」を購入し、叔母の吉園銀鶴に贈った。「パペ・モー」は銀鶴から孫の吉園修三に受け継がれ、さらに娘の明子に受け継がれた。

勇作とジルベルトの出会いは、1881年に5年間フランスに留学した時でした。この留学は薩摩軍の兵士、大山巖、西郷従道、野津通貫、高島鞆之助らによって手配され、勇作は後に野津の婿となりました。

この留学中に、勇作とジルベルトの秘密結婚も計画された。この結婚を仕組んだのは、フランス駐在の日本公使館所属の砲兵大尉・田島正親大尉と、箱館戦争の戦友である砲兵中尉・ジュール・ブリュネである。ブリュネはアルザス出身で、ポンピドゥー家と同郷だったこともあり、よく知っていたと思われる。

上原勇作のフランス留学年表

1881年4月、陸軍工兵隊少尉であった勇作は、5年間のフランス留学を命じられ、同年7月にフランスのグルノーブルにある第4工兵連隊に配属された。

1882年8月にフォンテーヌブロー砲兵工兵学校に入学し、9月29日に陸軍砲兵隊の中尉に昇進した。

1884年9月10日、陸軍大臣大山巖の欧州軍事施設視察に同行し、フランスのトゥールの要塞を視察した。

1885年6月13日、陸軍工兵隊大尉に昇進し、12月23日、フランス留学を終えて帰国した。

帰国後、勇作はハーグ会議の前に二度ヨーロッパを訪問しており、そのたびに旅行中にジルベルトと会ったとみられる。

小沢中将同行

1889年3月19日、勇作は小沢武夫臨時砲台建設部長中将の欧州視察に同行するよう命じられ、5月2日にマルセイユに到着。オーストリア、ロシア、北欧諸国、ドイツ、オランダ、ベルギーを巡り、7月2日からフランスに滞在した。

8月23日からイギリスを回り、9月7日からフランスに滞在し、10月27日から南欧を回り、12月15日に帰国の途についた。このとき優作のフランス滞在は2回に及び、合わせて100日以上に及んだ。

王子に同行

1896年3月、ロシア皇帝の戴冠式に参列するため派遣された伏見貞愛親王に随行するよう命ぜられ、同年8月12日に帰国した。この間、ロシアからフランスへ渡航していたことから、ジルベルトと再会したと推測される。

1928年、甘粕の女主人が母親の死を告げる

ジルベルト

勇作の叔母、吉園銀鶴の孫、吉園修三は勇作に付き従う陸軍特務官として勤務していたが、修三に極秘任務を託したのは勇作自身が甘粕正彦であった。甘粕事件後、甘粕が千葉刑務所に収監されていた間、修三は頻りに甘粕を訪ね、暗号メッセージで連絡を取り合っていた。

1928年、周造は勇作から託された極秘任務で陸軍予備中尉の石光真清とともに渡仏し、甘粕正彦、画家の藤田嗣治らとともに極秘任務を遂行した。しかし、アルザスを訪れた甘粕は、勇作の親戚と思われる35歳前後の女性から受け取った伝言を持ち帰った。それは「母ジルベルトが昨年亡くなったことを勇作に伝えてほしい」というものだった。

もしその女性が35歳くらいだったとしたら、彼女の生年は1893年頃ということになる。その時期を考えると、ジルベルトがその時期に日本に来て勇作と会ったのではないかと推測することはできるが、日清戦争という背景を考えると、その可能性は低いと思われる。1896年に伏見公サダナル公の随行員としてフランスを旅行中にジルベルトと出会ったときに、ジルベルトが娘を身ごもったと考える方が自然かもしれない。

娘さんが1897年頃に生まれたと仮定すると、1899年に林忠男爵に同行してハーグ講和会議に出席した際に、優作はジルベルトとその娘に会ったことになる。ジルベルトの勧めでヴォーラール美術館を訪れた際に、上原はパプ・モーを購入している。

アルザスのポンピドゥー一家の婿、上原と甘粕

アルザスのポンピドゥー家はハプスブルク家とゆかりがある。ジルベルトの兄はメソジスト派の牧師で天津南開高校とも関係があった。1916年に裕作と姪とともに来日し、青山教会の牧師となった。

周幸三は「周幸三の回想録」の中で、東京で中将、参謀総長となった従弟の勇作とよく会っていたと記している。

甘粕は、パリで周造らと話す際、勇作の紹介で秘密の妻となった勇作の娘のことを他人のように話していた。それは甘粕が彼女との関係を側近にも極秘にしていたためである。しかし、周造は1921年に天津南開高校から日本に留学していた呉漢涛と王希田からそのことを知った。

当時陸軍歩兵少尉だった甘粕は、陸軍戸山学校での負傷を理由に、1918年に憲兵隊に転属した。この転属は、汪希天、呉漢涛、周恩来らを警護するため、勇作の命令だったとみられる。

ポンピドゥー一家の策略に組み込まれ、勇作と甘粕はハプスブルク王朝下で秘密作戦に従事し憲兵団に転属となった日本滞在中の南海三人組の支援・警護を任される。

紀州文化振興協会代表 落合寛治